

宮沢賢治草稿とみられる「S博士に」のインク元素分析の結果等について

令和2年6月17日に、公益財団法人総合花巻病院から寄贈いただいた資料に、宮沢賢治草稿とみられる「S博士に」がありました。今回、それと同時期に書かれた草稿「ひるすぎの三時となれば」のインクと用紙の元素分析を行いましたのでお知らせいたします。

▶ 目的

宮沢賢治草稿とみられる「S博士に」は、賢治の直筆であるのか判断するため、同時期に書かれた草稿「ひるすぎの三時となれば」のインクと用紙を元素分析によって比較するものです。

▶ 分析機関

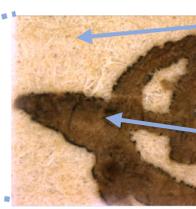
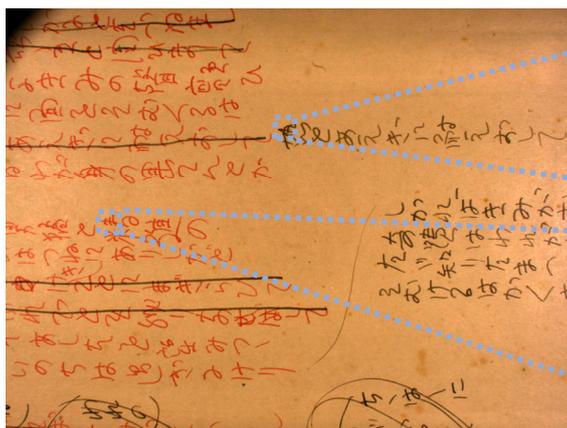
株式会社大塚巧藝社

▶ 調査概要

宮沢賢治草稿とみられる「S博士に」に使用されている黒インク、赤インク部分の元素の定性分析（ポイント分析）を実施し、同時期に書かれた草稿「ひるすぎの三時となれば」（宮沢賢治記念館所蔵）の黒インク、赤インク部分の元素の定性分析（ポイント分析）と比較して、「S博士に」が直筆であるかどうか判定材料としました。今回は、非破壊検査を原則として蛍光X線分析法を採用し、主成分の炭素以外の元素を比較しました。

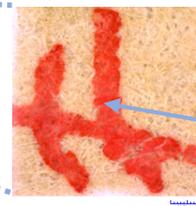
▶ 「S博士に」「ひるすぎの三時となれば」ポイント分析測定箇所と結果

「S博士に」分析箇所



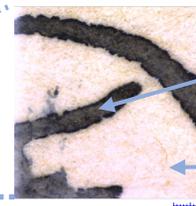
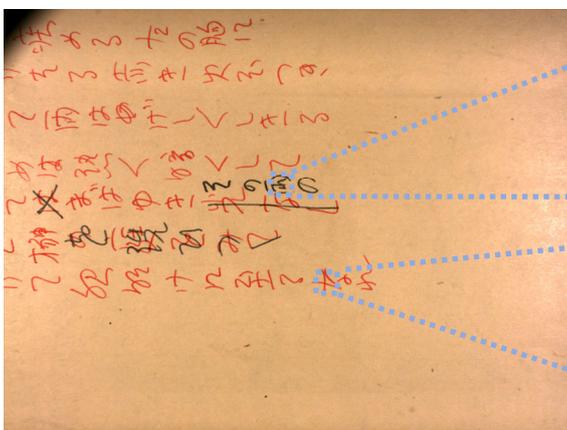
「S博士に」用紙

「S博士に」
黒インク



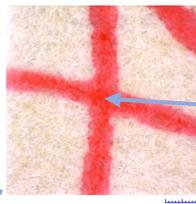
「S博士に」
赤インク

「ひるすぎの三時となれば」分析箇所



「ひるすぎの三時
となれば」黒インク

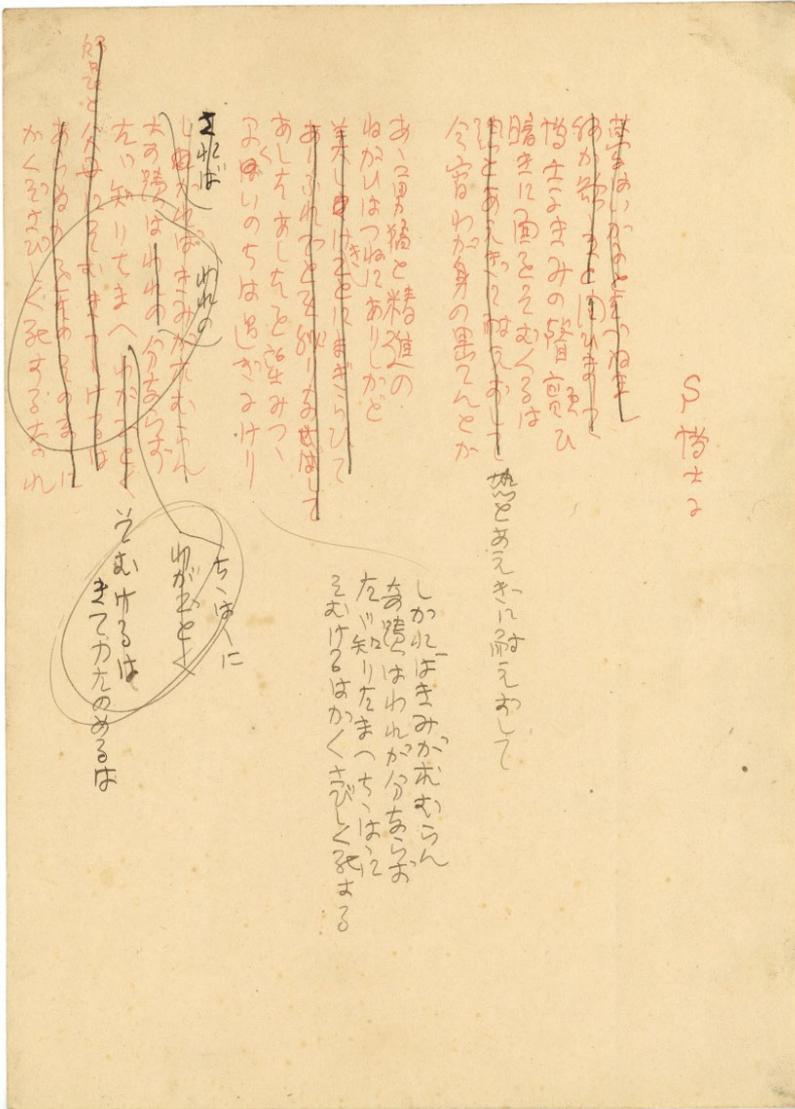
「ひるすぎの三時
となれば」用紙



「ひるすぎの三時
となれば」赤インク

結果

- ◇ 「S博士に」と「ひるすぎの三時となれば」において、用紙、黒インク、赤インク部分での蛍光X線スペクトルに大きな差は見られませんでした。
- ◇ この分析結果から、寄贈された草稿「S博士に」は、宮沢賢治の直筆の可能性が極めて高いと思われます。



寄贈いただいた
「S博士に」

S博士に

博士よきみの声顫ひ
暗きに面をそむくるは
熱とあへぎに耐へずして
今宵わが身の果てんとか

ああ勇猛と精進の
ねがひはつねにありしかど
あしたあしたを望みつつ
早くいのちは過ぎにけり

しかればきみが求むらん
奇蹟はわれが分ならず
ただ知りたまへちちははに
そむけるはかくさびしく死する

『宮澤賢治全集第10巻 月報1』より
筑摩書房S33.7

▶ 宮沢賢治の「S博士に」とは

- ◇昭和3年8月10日、賢治は高熱を発して倒れ結核と診断されました。その後、病床において賢治は詩を書き続けました。
- ◇病をテーマに書いた一連の詩が「疾中」詩篇としてまとめられ、書きかけと思われるものも含めて29篇からなり、上画像の「S博士に」も含まれています。
- ◇「疾中」は死に直面した賢治の内面の揺れ動きが表現されています。
- ◇この草稿は、花巻空襲から賢治の作品や資料を戦禍から守った宮沢清六氏から、主治医であった佐藤隆房氏に贈ったという全集の記録も残されています。（下記参照）

花巻が戦災に遭ったのは、昭和二十年の八月十日でした。その戦災で賢治さんの実家は全焼したのですが、その時大切なものは、土蔵と防空壕に入れられたのです。（中略）やがて元の屋敷に戦後のささやかな家屋ができて、引っ越したのです。そのあともない初夏の朝、清六さんが私の宅に来ましたので会いますと、巻いた紙を私に出して

「これは防空壕で私たちが死ぬ思いをして守った賢治の原稿の中の一枚です。『S博士に』と書いてありますから、別の詩稿『S博士に』『眼にて云ふ』のとあわせて読んで見ると、これは間違いなくあなたのことです。この原稿はそれであなたに差し上げます。」

佐藤隆房「自らを責める」（『宮沢賢治全集第10巻 月報1号』筑摩書房，昭和33年7月）より

▶ 今後の活用方針について

- ◇公益財団法人総合花巻病院から寄贈いただいた資料は花巻市博物館で保管し、活用については、宮沢賢治記念館と連携を図りながら、機会を捉え公開も視野に入れながら進めてまいります。